

以上が、本書の概要である。議論の細部や推論に、疑問や異論の余地なしとはしない。しかし、古代（あるいは各自の専門とする時代）と現代の関わりを考える、そして学問と社会のリンクを考えるうえで、本書に学ぶべき点が多い。専門の如何に関わらず、学問に携わる多くの人々の手に取っていただきたい好著である。結論にいたるまで著者の文章は平易かつ明晰であり、読者はその語り口に一気に引き込まれることだろう。

(B40版 二〇二頁 P H P 研究所
二〇〇九年二月 税別七〇〇円)

(佐野光直)

A. Cain & N. Lenski (eds.),

The Power of Religion in

Late Antiquity

一九七〇年代以降、西洋古代史の領域では、二〇世紀後半の文化多元主義を思想的背景として伝統的なローマ帝国衰亡史観を拒絶する「古代末期」(Late Antiquity)

なる研究分野が台頭し、一九九五年には米国でこの領域を専門に扱う学会「古代末期の境界変動」(Shifting Frontiers in Late Antiquity)が発足した。各大会の成果は論文集として一九九六年から刊行が始まり、その七冊目となる本書には、二〇〇七年に米国・コロラド大学で開催された第七回大会の報告四四本のうち、内容の質および「宗教の力」というテーマへの関連性如何の観点から審査を経て選ばれた二八本の論考が収録される。執筆者は米国の一四名と

英国の六名をはじめ、イタリアから二名、ニュージーランド、アイルランド、豪州、カナダ、オランダ、ドイツから各一名と、英語圏の研究者が中心だが欧州諸国からも若干の参加があり、実際の大会には他にスペイン、ギリシア、またイスラエルからの参加もあったようである(大会ホームページ <http://www.colorado.edu/Classics/events/SFVIIHome.htm> および『古代史年報』六、二〇〇八年、五三六五頁所収の足立広明氏による本大会参加記を参照)。本書は、編者のひとりN. Lenskiによる趣旨説明と簡要な内容紹介を含む序論に続き、八部から構成される。限られた紙幅

ゆえ多岐に及ぶ論点の一端を詳しく紹介することは叶わないが、編者の言をよすがとして各部の内容を瞥見するならば、あらまし以下のごとくである。

第一部は「宗教と言葉の力」と題され、「古代末期」の著作家フルゲンティウスやアンブロシウスらによって、ウエルギリウスやセネカなどの古典文学が新しい文脈のなかでいかに繰り返され変容したか、宗教・力・テキストの交差する場が探られる(E. Albu; J. Lössl; G. Raspariti; D. Shanzer. 括弧内は執筆者、以下同)。第二部「神を御する」は、「古代末期」の哲学者ボルフュリオスとイアンブリコスを主たる対象として、新プラトン主義とその神秘秘術に関する論議を扱う(E. Digeer; S. Krüpe; A. Johnson)。第三部「皇帝と宗教的権力の展開」では、モダニストによる「教会と国家」の区別は「古代末期」には適用しえぬとされ、皇帝権力と不可分に結び付けられた当時の宗教的権威のありさまが、嬰兒遺棄やテオドシウス二世治下の宗教政策などを通じて考察される(J. Grubbs; H. Elton; C. Pazdernik; H. Leppin)。第四部「教会のヒエラルキーと宗教的権力の

「範圍」は、ヨハネス・クリュンストモスやアウグスティヌスらの言説の分析から、キリスト教司教が有した権力を社会的・政治的世界のさまざまな境界内に位置づけるとの試みで、司教と世俗社会との関係を考える上でも示唆に富む (S. Huebner, J. Stephens, G. Clark, L. Bailey)。コンスタンティヌス大帝がみたという有名な「天空上の十字架の幻」が主題となるのが、第五部「コンスタンティヌスと十字架の力」である (H. Drake, J. Long, J. Drivers)。一説に大帝がみたのは日暈だったともいわれるが、本書では時代状況と史料とにより密着しつつ「幻」の意義が再検討される。

第六部「ローマ」では、かつて帝国の中心・伝統宗教の牙城であった都市ローマが、往時の地位を失ったのち徐々にキリスト教化してゆく複雑かつ動的な変容の諸相に光が当てられる (R. Testa, L. Grig, J. Lahman)。第七部「蛮族」時代の帝国西部における宗教の力」は、トゥールのグレゴリウスなど文献史料に加え図像資料や考古資料をも用いて西方のゲルマン諸王国と宗教との関わりを論じ (R. Mathisen, E. James, B. Young)、第八部「帝国東部の

共同体における宗教の力」では、アンティオキア、イエルサレム、ニシビスなど東方諸都市において宗教がいかなる力を持ったかが、ギリシア・ラテン語史料のほかシリア語史料の検討から描き出される (W. Mayer, H. Sivan, J. Weisweiler, R. Payne)。

かくして本書の内容から、近年の「古代末期」研究の状況と多彩な展開とを容易に見て取ることができるわけであるが、紹介者にとり最も興味深い事実は、今や「古代末期」概念そのものもまた「境界変動」の只中にあるらしきことが、編者 Lenski の序論のなかに察知しうる点である。例えば、

「古代末期」の時代範囲は従来概ね三世紀後半〜八世紀とされてきたが、本書では三世紀末〜七世紀初頭とされる。また、当該時代はこれまで「移行」や「変容」の時代だと強調されてきたが、本書では、かかる歴史の変容の速度が一層加速した文化的・社会的転換の時代だったとされる。「蛮族」の侵入、キリスト教化、政治的動揺などによって特徴づけられる「動乱の時代」(tumultuous period) だった、というのである。本書の主題たる「宗教」は、かか

る転換の時代にあつて、ローマの政治的ヘゲモニー崩壊後の空隙を埋めるものとして捉えられているが、しかしながら、かような編者の理解は、かつて「古代末期」の主人公 P. Brown が、M. Rostovtzeff の学説とともに「メロドラマ」と断じた E. R. Dodds 流の「不安の時代」への回帰であるかのとき印象さえ与えるであろう。それゆえ、「古代末期」研究にとって、かくのごとき概念としての揺らぎをどのように克服してゆくのが、今後のひとつの大きな課題となるのではあるまいか。

なお、本書に続き、二〇〇五年に米・イリノイ大学で開催された第六回大会の論文集が、R. Mathisen & D. Shanzer (eds.), *Romans, Barbarians, and the Transformation of the Roman World: Cultural Interaction and the Creation of Identity in Late Antiquity*, Farnham: Ashgate, 2010 年 11 月近刊予定である) を付記しておく。

(234×156 mm, pp. xvii + 464, December

2009, Farnham: Ashgate, £65.00)

(南雲泰輔 京都大学大学院文学研究科博士後期課程・

日本学術振興会特別研究員)